

知恵の樹

No. 148 2010. 3. 24

町田の図書館活動を
すすめる会

事務局：町田市森野3-1-12 増山方
〒194-0022 FAX 042-722-1243

図書館利用の可能性を拡げる 視聴覚事業

—AV(視聴覚)新担当のこの一年—

市立図書館AV担当主査 鈴木宏彰

AV担当(全7名)の仕事は中央図書館5階にて主にCDやDVDの貸し出しを行う貸出事業やレーザーディスクやビデオテープを視聴できる視聴覚ブースの運営ならびに映画会の実施です。新しくAV担当を任されてはや一年が経とうとしています。担当職員はじめ皆様に支えられて何とか無事に一年目を終えようとしています。おかげさまで来年度以降に向けて良いスタートを切ることができ、何より皆様に感謝申し上げます。

この一年を振り返ってみますと、まず最初に視聴覚ブースの運営が問題に直面しました。レーザーディスクの再生機器が販売終了後8年を経過しサービスを続けてゆくことが困難な状況になったのです。約4600枚ある視聴用レーザーディスクは洋画中心ですが品揃えは近隣の公共図書館より充実しており、土日は常にほぼ満席の状態です。平日でも8割以上の稼働率を保っています。図書館で取り扱っているDVDではレーザーディスクが所蔵している名作等をカバーすることができないため何とか視聴覚ブースの運営を存続させたいと考えていました。

結果的に、メーカー側によると業務用ではなく愛好家向けの家庭用再生機器なら最後に限定販売するという事で市長部局等との交渉の末何とか入手することができました。こうして視聴覚ブース運営を存続させることができ、今年度は特集で忌野

清志郎やマイケル・ジャクソンのライブ映像のレーザーディスクを特設展示することでたくさんの利用者に視聴していただくことができました。

次に取り組んだのが映画会事業の改善です。図書館法にも図書館の事業として規定されている映画会ですが、一般に図書館のイメージとしてはなじみが薄いものとなっています。今年度から試験的に図書館評価も始まり、映画会事業の方針を改めて定めるべき時期に来ていました。

まず、映画会に来る観客は映画だけを見に図書館に来て映画が終わればすぐ帰る方が多いことに気がつきました。せっかくたくさんの方に来ていただいたのだから是非本を借りて帰って欲しいと思いホール前にて上映映画に関する本を中心に展示することを始めました。また、映画の視聴マナー改善のため、ポスター掲示や放送による呼びかけを行いました。来年度以降は映画会鑑賞者に幅広い図書館利用をしていただくための工夫をさらに実施していきたいと考えています。

最後にCD・DVD等の貸出事業ですが、レンタルCDショップの存在を意識しつつ、図書館に求められている資料収集の方向性について考えてきました。そんな折、250万部を超えるベストセラー『頭がいい人、悪い人の話し方』の著者樋

口裕一さんの書いた『頭が良くなるクラシック入門』という本の中にフランス南部のナントという街でクラシック音楽祭を始めて市民がクラシックに親しむようになったら、知的好奇心が刺激されて図書館等の文化施設の利用率が飛躍的に上昇したという趣旨の記述を見つけました。これを見て「やはり視聴覚事業は工夫次第で図書館全体の利用者増加に貢献することができるのではないか」と感じました。

そこで、普段クラシック音楽になじみが無い方達にCDを手にとってもらいたいと考え、この夏映画上映など話題の大きかった「新世紀エヴァンゲリオン」の劇中にパッヘルベルの「カノン」やヘンデルの「メサイヤ」などクラシック音楽を多く使っていることに着目し、エヴァンゲリオン特集ということでクラシックCDを集めて特集展示することにしました。これが大変好評でしたのでこれからも意外な切り口

からクラシックに親んでもらえるよう担当全員で知恵をしばっていきたいと考えています。一方で、去年は「1Q84」ブームにあわせて村上春樹さんの作品に出てくる映画・音楽の特集を実施したところ、こちらも大きな反響がありました。また、今年はショパン生誕 200 年ということでショパンにちなんだ企画も実施したいと思います。

「文字・活字文化振興法」制定・施行 5 周年にあたる 2010 年は「国民読書年」ということですが、一方ではひと月に本を一冊も読まない人が世代によっては半数近くいるという状況の中で、図書館で本に親しむための橋渡し役としてAV担当の仕事はますます重要であると感じています。財源等不安要因を挙げればきりがありませんが、ここは取敢えてチャンスととらえて今年も積極的に利用者に企画を提案していきたいと思います。



平成21年度 東京都多摩地域公立図書館大会に参加して

去る2月18日、国分寺市立いずみホールにて開催された平成21年度東京都多摩地域公立図書館大会、第6分科会(児童サービス)に参加してきました。外部の会合に出席するのは初めての経験だったので、他市の図書館の職員が集まるのはどんな感じなのか、一体どのようなことが行われるのか、わくわくして出かけました。

会場は立派なホールで、開会の挨拶が始まる頃にはほぼ満席。会場に集まった人がすべて図書館に関係する人だと思えば、なんとも不思議な気分でした。

今回のテーマは、「子どもと本の世界を結ぶ人たちー図書館員・ボランティアの役割を考える」。前半は、同テーマによる後藤暢先生(元専修大学教授)の講演から始まりました。後藤先生のお話は児童サービスに限定されず、図書館とボランティアの関わり、また広くは専門職の労働問題にまで及び、私には難しいものでした。しかし、「ボランティアが職員の代替要員ではなく、相互補完的な役割を持つもの」であり、「市民参加が活発化することにより、専門職員の重要性が明確になる」ということを繰り返しお話になり、図書館と図書館に関わるボランティアへの熱い思いがひしひしと伝わってきました。これを聴き、自分も必要とされる職員になれるよう精進しなくては・・・と思いました。

後半は、各図書館の取り組みの報告がありました。トップバッターは我らが町田市立図書館。中央図書館の北村真理さんが「ボランティア・教員、みんな一緒に研修会」という報告をされました。図書館のノウハウを学校図書館でも活かしてもらうための研修会の立ち上げから現状までの説明がありました。恥ずかしながら、町田の図書館でこのような研修が行われていることを詳しくは知らなかったもので、とても勉強になりました。

この他には、立川市立図書館で行われている学校で読み聞かせをする保護者のための「読み聞かせ出前講座」についての報告、東村山市立図書館からは子どもと本に関わる様々なボランティア団体を結ぶ「東村山うちでのこづち」結成の経緯と、「子ども読書応援団養成講座」の開催についての報告がありました。特に東村山市は、図書館職員と一緒にボランティアの方も昔話風の語りを交えた楽しい報告をされ、図書館とボランティアとの良好な協力関係が垣間見え、この様な協力関係を継続させていくことができれば、子どもと本を結ぶ活動もますます発展していくことだろうと感じました。(木曾山崎図書館 囑託 高月亜矢)

知的障害者も、読書する。



～シンポジウム『やさしく読みやすい本』が読書の扉をひらく！』に出席して～

都立特別支援学校教員 鈴木 薫

「読書」とは、何だろう？

一般にイメージするのは、小説や新書などを読むこと。大量の文字列を目で追いながら、知識を頭に流し込んでいく姿だ。では、文字が少ない絵本は、読書ではないのか？ 文字のない写真集は？ 習いたての英語で、洋書を読むのは困難だ。辞書がなければ難しい。中国語の文章は、漢字を頼りになんとなく意味がわかるかもしれない。そこに、写真やイラストがたくさんあったら、もっとよく意味がわかるのではないか。なじみのないアラビア語の本も、写真やイラストが細かくたくさんあれば、内容くらい推測できはしまいか？ 特別支援学校で教員をしている私が見る、知的障害者や発達障害者の読書は、そんな感じだ。

生徒と図書館へ

先日、授業で近所の図書館へ、高校生の生徒を連れて行った。でも、重度の知的障害者で、文字を読むことは難しい。教師の言っていることも、実際のところは“雰囲気”で感じ取っているにすぎない。そんな彼らも、図書館に行くと目の色が変わる。絵本コーナーに行く者。雑誌コーナーに行く者。一番本に興味を持っている生徒は、雑誌コーナーからも離れ、一般書の書架へ。文字が読めないのに、何を見るのかと思ってついでにいくと、なんと「高血圧に効くメニュー」とかいう本を手にとった。紙面に向ける眼差しは、真剣だ。もちろん、彼は高血圧が何たるかもわからない。でも、その真剣さといったら、立派な読書。あんなに、学校では奇声をあげて、飛んだり跳ねたりしている生徒でも、何度も授業を通して図書館を利用してきたから、「静かにしなければいけない場所である」というルールもわかっている。「知的障害者は本が読めない」などという人は誰だ？ 私は胸を張って主張したい。図書館に来て、本に触れ、彼らは立派に「読書」ができるのだ。

知的障害や発達障害は個人差があるとはいえ、み

な文字の読解や、言葉での理解が難しいといっているだろう。視覚優位である彼らは、写真やイラスト、シンボルといったものの理解が得意だ。前述したように、なじみのない外国語の本を読むときのように、言語そのものがわからなくても、写真やイラスト、シンボルを手掛かりに、内容を推測することができる。だから、図書館に来た生徒たちは、絵本や雑誌コーナーを自分の場所だとしたのだ。でも、高校生にもなって、絵本なんて読んでいていいのだろうか。ミッフィーにアンパンマン。精神年齢としてはそんなものでも、成長年齢だって無視できない。本当はもっと興味の幅を広げられるのかもしれないのに、アンパンマンの絵本しかわからないから、アンパンマンしか読まないのでは、それはなんと悲しい読書だろう。

シンポジウムに参加（2月27日）

職場で回覧されていたチラシを頼りに『『やさしく読みやすい本』が読書の扉をひらく！』というシンポジウムに行ってきた。副題は「知的障害・自閉症のある人の読書環境を考える」だ。（*自閉症とは、知的障害があるなしにかかわらず、コミュニケーション面での発達障害である。）

近頃、公共図書館を利用するたびに、知的障害者にとっては利用しにくい空間だと感じていた私は、その内容に期待を膨らませながら出席した。内容は、期待以上の、とても考えさせられる良いものだった。だが、400人が入るといふホールはゆとりにあふれ、チラシは職場で回覧されていたのに、職場の人に出会うこともなかった。知的障害者に対する読書への関心など、現時点ではそんなものなのだ。

セミナーで、「LLブック」「マルチメディアDAISY（でいじー）」という“本”と、「ステージ」という新聞を知った。

「LLブック」は“優しく読める本”（スウェーデン語が由来）という意味。「生活年齢や経験に応じた内容が

わかりやすく書かれている本」のことである。

スウェーデンは、ノーマライゼーション(障害があっても平等に生きる権利)を基に、1960年より知的障害者の読書を保証するための政策が開始されているようだ。具体的な内容、論理的でシンプルな言葉使い、はっきりとした図版、わかりやすいレイアウトを研究し、毎年30冊を出版している。近畿視覚障害者情報サービス研究協議会では、このLLブックの特別研究グループを編成し、LLブックを進める活動を行っている。そのなかで、知的障害者に「読みたい本、見たい本」をリサーチすると、「わかる本が少ない」「文字が多いと読みたくなくなる」「恋愛や禁煙、野球など、興味のあることをもっと知ることができる本が欲しい」といった意見が出たそうだ。

知的障害者も読書への欲求があるのに、それが満たされる環境には程遠いということがわかる。

「マルチメディアDAISY」は、パソコンを使って読む本だ。具体的には、パソコン画面にイラストと文章が同時に表示され、文章はパソコンが読み上げてくれる。読み上げている個所の段落に色がつくので、ある程度の文字が表示されていても、一目でどの部分が読まれているか目で追うことができる仕組みだ。

実際に、私も「3匹の子ぶた」などを買ってみた。原文のままだと知的障害の程度によっては、内容がわかりにくいという問題や、色がつく部分が長すぎる場合があるという難点を感じたが、文章を目で追うことが難しい学習障害者には効果的である気がする。

「ステージ」は、全日本手をつなぐ育成会の出版物で、「知的障害のある人達にもっとわかりやすい情報を！」という願いが込められている新聞だ。難しい言葉や表現をより易しくし、写真やイラストを多くしていることが特徴で、編集には知的障害者、新聞記者、福祉関係者がかかわっている。

墨田区立あずま図書館における、福祉作業所への出張貸出の現状の報告もあった。「本を読みたい」「CDをききたい」というニーズ。でも、視覚障害者用の大活字本や拡大写本を用意しても、図書館が読者の要望に応えることができないのは、本そのものが知的障害者のほうを向いていないからだ、私は感じた。読める本があれば読みたいのに、読める本がないから読まない。知的障害者は読書からおいてきぼりにされている。

鳥取県立白兎養護学校の学校図書館からの報告もされた。知的障害のある小学生を相手とした、絵本による読書教育の成果は、同業者として感動さえ覚えた。教師と一緒に読んでいた段階が、興味をもって自分で本をめくるに至る。それが、どんなに大変なことか、どれほどの人がわかってくれただろうか。だが、現状では司書教諭(図書室にいる教員)の配置も、学校司書(図書室にいる事務員)の配置すらも十分ではない。特別支援学校では教室不足のあおりを受けて、図書室は本を出されて普通教室になっている(私の学校も同様だ)。現場の教師ですら、「知的障害者に本は読めない」という人さえいる。読めないのではない、読める本がないのだ。

知的障害者や発達障害者、学習障害者といった区分が広がり、学校を中心として一般にも認知されるようになってきた。言葉が通じにくい、ちょっと何を考えているのかわかりにくい。そんな人が、どうやらたくさんいるらしい。私が思うに、現代社会になって増加してきたわけではなく、一種の“発見”として気付かれてきているのではないか。その人達も、どうやら自分は言葉が通じにくい、伝えにくいと感じている。

社会の中で、そんな困り感を感じた時に、何かの助けや知識を求めて行く場所の一つに、公共図書館があるのではなかったか。公共図書館に行くと、点字による案内があり、点字本が並ぶ。カウンターでは、筆記によるレファレンスも望める。視聴覚機材があり、朗読を聴くこともできる。おはなし会などいろいろな催し物もある。次は、知的障害や発達障害のある人にも、目を向けてほしい。学校図書館も、同様だ。そして何よりも、そのためには、知的障害者も読める本を増やしていくことが必要だ。

400人が入るホールは、その全ての席は埋めることができないあかつきけれど、それでも0ではなかった。私も居た。誰かも居た。まずは私も一歩、こうして伝えることから始めてみよう。いつか生徒にも本を“読ませて”あげたい。そんな願望を抱きながら。

(すずき かおる/会員)

【参考文献】

藤澤和子・服部敦司/編著『LLブックを届ける やさしく読める本を知的障害・自閉症のある読者へ』(読書工房)

図書館の広報紙を読む

町田市役所 石井 一郎

町田市立図書館で「二十祭まちだ」応援事業として「2010年はたちに贈るこの一冊」が発行された。今年、中央図書館の新着図書の本棚にあったのもらってきた。面白かったので、横浜市山内図書館に勤務する知人に「知恵の樹」と一緒に送った。知人から「町田市はがんばっていますね」と好評だった。

「2010年はたちに贈るこの一冊」の内容は最初にくレファレンスカウンターから>のページがあり、レファレンスカウンターにある参考資料の紹介。テーマは①新聞記事を調べる②時事を調べる③歴史、人物を調べる④暦を調べる⑤風俗、流行を調べる⑥その他の6項目。風俗、流行を調べるでは『1946-1999売れたものアルバム』から成人を迎えた方の生まれた年の1989年の流行した商品の紹介があった。

次に職員からの読んでほしい本15冊の紹介があり、働くこと生きることを考える本やノンフィクションや小説などの作品が取り上げられている。最後に、町田市ゆかりの作家紹介で、加納朋子と遠藤周作の二人の作品紹介になっている。

図書館を利用するとき、図書館が発行している広報紙をもらってくる。町田市以外にも旅先で立ち寄った図書館や勉強会で調べに行った図書館にも集めている。集めた広報紙を読んでみると発見がある。3つのポイントで比較してみると面白いので紹介したい。

◎特集記事や行事案内から図書館(員)がどこに力をいれているか

「横浜市立図書館報 第52号」(2005年3月)の特集記事。ホームページ上に「都市横浜の記憶」と名づけたページを立ち上げたことを掲載している。歴史年表や開港当時の絵図や浮世絵などの画像が見ることができる。横浜市はホームページを使い全国に発信している。

藤沢市の「図書館だよりNo.160」(藤沢市立図書館2009年2月)には郷土の文化人という連載記事があり、藤沢市在住の関東学院大学の山田宗睦教授の

紹介と所蔵作品が掲載。郷土のことに力をいれている。

町田市の「図書館だより 第94号」(町田市立図書館2009年3月)の特集記事は「小野路地域 里山を訪ねて」。小野路の紹介記事と写真と参考文献が掲載されている。レファレンスや調べものに力をいれている。

◎広報紙の読者の対象者をどこにおいているか

逗子市立図書館で発行している「おひざにだっこ」の絵本は年齢別の絵本の紹介になっている。Part1は2~3歳児に贈る絵本のリスト、Part2は3~4歳児に贈る絵本のリスト、Part3は4~6歳児に贈る絵本のリスト。別に、0~2歳児に贈る絵本リストもある。対象を細かくしており、親御さんの読み聞かせの参考になる。

町田市の「YA通信」は中高生を対象の本の紹介。中央図書館のヤングアダルトコーナーの伝言板などに書かれたイラストが多数掲載されている。

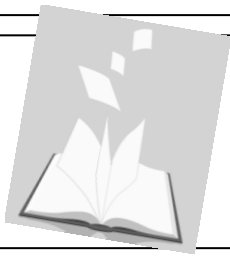
名古屋市立鶴舞中央図書館で発行している「ごちゃっと」は町田の「YA通信」と同じく中高生向けの広報紙。司書のオススメ本や新刊案内になっている。紹介記事は手書きである。表紙のイラストはイラストレーターのイクタケマコトさんが描いている。イクタケさんは鶴舞図書館職員にご兄弟がいる関係で描いている。個人的には「ごちゃっと」の方が見た目にすっきりしていて好きだ。

町田市の「レファレンスコーナーのご案内・地域資料コーナーのご案内」は、書架の配置図と資料案内が1枚の紙に両面印刷されている。資料案内に、資料名と配置位置が書かれている。レファレンスコーナーを初めて利用する際に役立つ。一般的に図書館の書架配置図に資料案内がないのでいいアイデアである。

◎利用者参加か

日野市の「館報 ひろば」には、利用者の投稿のオススメ本の記事がある。町田市でも「YA通信」で増刊号としてオススメ本特集を組んで、中学生たちのオススメ本が紹介されている。

複数の図書館の広報紙を読んでいると面白いので、皆さんも読み比べてみてください。(会員)



「子どもと本の広場」へ行ってきました！

第 22 回多摩文庫展 一本の世界であそぼうー

於：ベルブ永山・永山図書館

会期：2月20日(土)～24日(水)

2月21日(日)、1年生と4年生の孫と一緒に永山図書館に出かけました。多摩には6ヶ所の地域図書館があり、文庫も10何ヶ所あります。

年々、催しも多様になり今年の4日間はおはなし会あり、講演会、展示、かるた会と毎日通いたくなるような催しでした。

まず入り口のギャラリーでは、動物画家・藪内正幸の絵本原画展がありました。藪内氏の『くちばしーどれが1番りっば？』『どうぶつしりとりえほん』等の原画が壁いっぱい飾られ、その美しさ見事にしばし見とれてしまいました。また、つづきのギャラリーには「9ぞうくんげんきかるた」の原画展もありました。憲法9条を守る平和を考える会「子どもの本九条の会」が作ったもので、45人の画家の手によるものでした。

隣のフロアーは文庫の展示室で、子どもと本に関わるグループ(文庫連、学校図書館、児童文学研究会、布絵本サークルなど等)10団体のパネルが並び、テーブルにも本に関係した楽しい飾りつけが並んでいました。

床には大きなタペストリーが敷かれ、フェルトで作った小さな像がいっぱいくっついていました。文庫展を見に来てくれた人も参加して「ちくちく・・・」と縫い上げたものようでした。入り口近くにテーブルと椅子が用意され、絵本が10冊あまり置いてあり、孫達はさっそくその本を読み始めました。そこは絵本クイズのコーナーで、5冊の本を読み、例えば『こすずめのぼうけん』については「こすずめがさいごに会ったのはだ～れ？」といったクイズに答えるものでした。全問正解で、フェルトで作ったペンダントを首にかけてもらい喜んでいました。いろいろ、きめ細かな配慮がされ楽しい展示がされ、文庫が子ども達の身近にあり生き生きと活動している様子が伺えました。

期間中は今日を除いて毎日おはなし会も開かれたようで、楽しそうなプログラムだけ頂いてきました。

午後は、藪内竜太氏の講演会「稀代の動物画家 藪内正幸～その画家として、親としての姿」がありました。

～講演会より～

藪内亮太氏は父正幸氏亡きあと、小淵沢の「藪内正幸美術館」の館長を務めています。息子の目から見た動物画家藪内正幸を楽しく時間いっぱい語ってくれました。

藪内は動物画家になるため生れてきたような人で、幼少時から動物が好きで絵が好きだったこと。小学校の頃はノートは全部動物の絵になり、教科書も余白は絵だけでした。小学生時代に動物学者の高島春雄氏と今泉古典氏と文通を始め、自分の動物画を2人に送るほどでした。

高校3年の時、福音館の松井氏に上京を進められて1959年上京し、本格的動物画家修行を始めます。最初は動物図鑑の仕事でしたが、指導してくれたのは小学生の時文通相手だった当時国立科学博物館の動物研究部長の今泉氏でした。「骨を知っていればすべてがわかる」と、科学博物館の地下室に毎日通って動物の骨格標本とはく製のデッサンをしたり、また上野動物園に通って写生をします。動物園に行くと、一日中ライオンならライオンと、そのおりの前から動かさず観察し、家に帰ってもライオンになりきっているという様子だったそうです。

幼い子どもたちの目を引き付けてしまう藪内の絵は「子どもには本物を見せたい」という厳しい観察眼と鳥やけものへの深い愛情から生れたものと思います。『どうぶつのおかあさん』『どうぶつのおやこ』などたくさん本を改めて子ども達と一緒に楽しみたいと思いました。

本の広場であそび、本に込められた作り手の思いを感じ、本を手渡す人々の熱意を感じ、本から元気をいただいた一日でした。(伊藤倭子/会員)

リレー・エッセー 言葉を探す旅 読書

町田市職員 兼松直子

私にとって読書とは、言葉を探す旅に出るようなものである。悩んでいること・知りたいこと・思いもかけないこと等々…。探していた言葉に出会える時も出会えない時もあるけれど、旅はとでも楽しい。そんな本を探す旅に出るのが好きで、週に2回は小旅行(もっぱら近所の本屋)に出かけている。最近、書店まで行かなくてもネット上で“小旅行”できるようだが、やっぱり手にとってページをめくって手に入れられる小旅行にはかなわない! かなわないけれど、ネット上で本についてのレビューやメルマガを読むのもこれまた楽しい。販促のために、サクラによるレビューも多いと聞いたこともあるが、自分では読まないような本でも、レビューの内容次第ではその本を実際に手にとってみることもあるし、レビューを読むだけで楽しく、わくわくするような発見や出会いがある。日曜日の朝刊に掲載される新聞の書評を読むのも楽しい。

最近、心理学にとっても興味がある。これまで人間は一人一人違っているから思想や行動はそれぞれ異なるものだと思っていたが、昔からの男女の、どちらかというとな本能的な役割や行動などを踏まえて考えると腑に落ちることがだんだん多くなってきて、ついには人間の心理についていろいろ知りたいと思うようになってきた。そんなときに頼りになるのはやはり本だ。難しい専門書を読むのは苦痛だけれど、入門書から読み始めればいつしか理解も深まり、気がつけば難しいと思っていた本も少しずつ読めるようになっていたりする。

こうやって自分の行動を振り返ってみて、実はかなり頻繁に“小旅行”に出ていることに気付いた。その際のお土産(=本)がかなりたまってきた、読むペースが追いつかず、積読が続いているのが現状だけれど…。「あの時買えばよかった!」と思うのが悔しいので、つい見つけた時に買ってしまふのだ。電子書籍なら積読は避けられるのかもしれないと思いついたが、まだ読んだことはない。電子書籍での小旅行はどんな旅なのだろう? 「やっぱり本屋での小旅行にはかなわない!」という自分が想像できそうだが、物はためしでそのうち新しいスタイルの旅にも出てみようと思う今日この頃である。

～図書館友の会全国連絡会 ML情報～

■2010年2月6日(土)、国立オリンピック記念青少年総合センター(代々木)でTRC「読書の学校」主催の講演会「公共図書館の新たな試み—学校支援モデル事業—」での報告(練馬区南田中図書館館長後藤久夫氏と職員の学校支援サービスコーディネーター白木順子さんのお話)が、新たな問題呼び起こしている。運営は全てをTRC(図書館流通センター)に委託。職員数29名(館長も含む、全員が1年契約のTRC社員)。南田中図書館の独自事業として学校支援モデル事業(期間はH21年4月～24年3月)が始まっており、その事業詳細は光が丘図書館長・事業実施校の校長・TRCの協議で決められた。職員29名のうち7名が学校支援員として、地域の小学校(4)と中学校(2)に授業を行う日に固定で派遣。21年度は、小学校200日以内、中学校については中間期末考査日を除いた195日以内で、1日6時間勤務。小学校担当は、15時まで学校図書館で勤務したあと南田中図書館に戻り、報告を兼ねてミーティングを行い、中学校担当は、図書館へ出勤しミーティングして、学校での勤務は10時30分から17時まで、直接帰宅する。活動内容は、学校図書館業務のすべてを請け負っている/公共図書館に指定管理者制度を導入することの弊害が国会で論議され、附帯決議に反映されたにもかかわらず、そのまま見直しもされることなく、学校図書館への支援という形で指定管理者制度が学

校教育へ広がっていくことを見過ごしてはならない/東京23区をはじめ、すでに指定管理者制度を導入している公共図書館で、指定管理者による学校図書館支援が進んでいくのでは? /子どもたちが直接の対象だけに、企業の派遣職員では、継続性・専門性・プライバシー・責任問題など、公共よりもっと深刻で大変な問題である、…と拡大するTRCの売り物(「図書館カウンター業務」「データ入力作業、書庫資料調査作業」「バックヤード業務全般(資料整理、書庫出納・配架、書誌作成など)」「図書館業務全般」等)に惑わされている図書館員や教員や学校図書館員が多くなってきていることに危機感を募らせ、市民の税金で、自治体が責任をもって運営されている公立図書館の業務が、選書も蔵書構成も近い将来掌握出来なくなるのではと、問題解決に向けての論議が続いている。

■H21年度の公共施設評価で、北海道立図書館は「事業の企画立案、市町村図書館との連携・支援等以外の業務については、指定管理者制度を導入するなど、早期に民間の開放領域を拡大し(略)」という知事評価結果が出された。それにより、市民団体が実行委員会方式による【北海道立図書館を考えるみんなの会】を設立して反対署名運動を起こしている。道立図書館に指定管理者が導入されると、道内市町村図書館への影響は避けられないとして全国的にもこれを阻止しようと署名活動が波紋を呼び膨らんでいる。当すすめる会も、賛同団体になり署名を集めている。



ひろば

＜2月例会報告＞ 24日(水)
 16:30～会報147号印刷
 18:00～20:30 例会
 於・公民館第一学習室
 (図書館休館中ため)

出席／石井 伊藤 久保 斎川 鈴木 高橋
 手嶋 増山 丸岡 水越 守谷 山口 山根

○会報148号について

・多摩図書館大会の報告(2p)/日・韓・中協同で平和についての絵本をつくる参考に、南成瀬中3年生に従軍慰安婦についての話を聞かせる会があり、会の様子や子どもたちの感想などの報告(未)/多摩文庫展の報告(6p)

・「自閉症・知的障害のある人の読書環境を考える」シンポジウムに参加。これに関連して『LLブックを届ける』(藤沢和子・服部敦司編著・読書工房¥2500)の紹介(3,4p)

○イベント確認

・3/14(日)14:00～「風のかたち」上映会の段取り、役割、広汎な情宣活動についても検討。図書館とすすめる会の共催による仕事の分担＝図書館：予約受付窓口・ポスター等PR・資料準備・会場設営・受付用紙準備・映写・他、すすめる会：チラシ作成・PR・当日受付・会場設営・司会進行・資料販売・他

・3/21(日)14:00～広瀬恒子さん講演会「2009年度新刊児童本紹介」の資料準備、役割、報告者等

○その他／図書館協議会が検討している多摩地域協議会連合化について／嘱託新採用に際して227名の応募があり、15名採用決定(7名補欠)。これで図書館は、嘱託79名、正職58名に／「市民がのぞむ図書館政策について」、次回もっと話し合おう

お知らせ

◆今年4月から墨田区八広図書館から常駐の職員がいなくなり民間に業務を全面的に委託するという事態に対し、練馬区や大田区などでの経験などを交流しながら、住民と職員で問題点を明らかにするための集会を行う／墨田自治研集会「**区立図書館の業務委託の問題点を考えよう**」／報告者：小形亮氏(練馬の図書館をよくする会)／3/25(木)18:30

2011年度 第1回 文学館(主催)で楽しむ
 おとなのためのおはなし会
 4月15日(木)10:30～11:30
 町田市民文学館 2F大会議室
プログラム



*町田ゆかりの作家「中村雨紅」 小泉ルミ
 *町田の民話「きつねに化かされた兄弟」砂川とき江
 *「山桜」(藤沢周平作) 望木祐子
 <語り:まちだ語り手の会> 直接会場へ!

～20:00／曳舟文化センター第1会議室(京成曳舟駅歩1分、東武曳舟駅徒歩2分)／墨田区職員労働組合(☎03-3624-8177)

◆『老いの超え方』(吉本隆明著 朝日新聞社)に差別表現があるとして不適切な箇所を指定して削除するよう図書館に求めてきた問題に関して、「**図書館の自由に関する宣言**」に違反する事態であるとして、図書館友の会全国連絡会が全国の図書館での対応を調査する一方、**緊急集会**を開く／4/25夜(18時～21時迄会場確保)／かながわ県民センター304 会議室(JR 横浜駅西口&北西口歩5分)／詳細未定。

◆**春の里山ワークショップ**／4/4(日)10時～15時(雨天11日)／野津田公園ヤマナラシ広場／皆でよもぎだんごを作ってお話を聞いて自然の中で春探しをする恒例のイベント／弁当・敷物・小皿持参／400円／問：野津田雑木林の会 ☎045-961-5045 久保

あしがき

14日、「風のかたち」上映会は無事盛会裏に終了

参加者は117名+スタッフ12名。伊勢監督と羽賀涼子さんのトークショーにも多くの人が残ってくださり、楽しんでくれた模様。職員と対等に協働作業をして共催イベントが出来たのは初めて!? (M)

